



椿鏡弓張月五冊四

13  
2945  
28





善悪もあらぬ禪子に只一刀ふ刺殺せし只願先非を後悔し  
 始終を了れし人され阿公が恨みかへ恨みをかきしし。まきのよまても  
 まても、さらば、あし、おひ、けれ、今、さら、付、の、ま、れ、よ、あ、の、主、後、と、を  
 いひながら、毛國典親子あへ、つ、う、け、恩、多、り、その、忠、孝、お、宥、めて、  
 命を助けさせんよ、痛くきり、つ、う、け、と、う、ち、漣、源、ひ、い、く、が、鶴、電、も  
 臉を押し拭ひ母新垣が、は、も、と、れ、齡、四、十、に、あ、り、て、有、身、と、る、を、公、う、け、て  
 陰陽師ふらせし、が、出生の子、の、男、あ、て、い、と、貴、う、は、げ、け、れ、と、年、十、お  
 満ちて、横死をせられたり、と、て、その、掌、を、指、さ、く、説、示、さ、れ、て、い、う、ま、さ、く、  
 公、あ、れ、れ、れ、も、父、あ、れ、終、て、告、げ、り、と、母、の、未、期、の、お、う、り、只、假、初、  
 として、その、せ、博、士、が、虚、言、を、い、う、ら、う、お、苗、め、あ、る、と、い、ひ、慰、め、し、  
 八年のゆり、と、い、あ、れ、と、れ、ト、並、の、い、と、誣、が、う、椎、子、を、見、え、ら、へ、あ、ら、ぶ、  
 贈りしも連枝の誠を、あ、れ、に、龜、を、ま、入、憐、れ、も、遂、お、その、死、を、救、ひ、う、の  
 て漣源とれ、面、お、れ、う、ま、は、目、お、え、ゆ、か、と、か、れ、口、説、外、へ、い、う、れ、袖、の、両、う、れ、の  
 虫と、卿、あ、そ、為、朝、頻、ふ、嗟、嘆、し、て、幼、稚、り、の、い、を、智、の、聖、罪、を、糺、と、ふ、ら、  
 は、し、し、只、阿、公、が、奸、曲、を、その、罪、放、し、が、じ、と、い、う、も、賞、を、べ、れ、る、ゆ、え、は、し、も  
 あ、れ、故、い、う、か、と、か、れ、が、彼、の、孫、を、王、子、と、號、り、南、風、原、の、城、を、籠、り、て  
 六年、が、間、山、南、者、と、り、も、あ、れ、れ、が、こ、そ、民、今、お、天、孫、氏、の、後、跡、を、と、る、と  
 り、て、曝、雲、逆、意、を、振、ふ、と、い、う、も、竟、は、山、南、と、奪、ひ、ひ、き、り、し、その、功、一、つ、  
 又、為、朝、う、身、に、その、當、初、阿、公、が、紀、平、治、り、地、圖、を、贈、り、し、こ、と、な、く、が、繼、  
 君、父、の、命、か、り、も、輒、く、こ、ろ、ふ、潜、ひ、ま、り、て、跡、を、捕、獲、て、あ、ら、ん、や、その、功、  
 ニ、つ、よ、り、て、阿、公、が、亡、骸、を、跡、龜、あ、れ、ひ、き、き、を、べ、け、れ、が、幼、稚、れ、あ、ら、ん、死、と、も、  
 葬、り、て、跡、吊、り、し、と、叮、嚀、お、説、諭、し、ま、る、が、跡、龜、の、容、を、あ、ら、ん、死、か、く、ま、

贈りしも連枝の誠を、あ、れ、に、龜、を、ま、入、憐、れ、も、遂、お、その、死、を、救、ひ、う、の  
 て漣源とれ、面、お、れ、う、ま、は、目、お、え、ゆ、か、と、か、れ、口、説、外、へ、い、う、れ、袖、の、両、う、れ、の  
 虫と、卿、あ、そ、為、朝、頻、ふ、嗟、嘆、し、て、幼、稚、り、の、い、を、智、の、聖、罪、を、糺、と、ふ、ら、  
 は、し、し、只、阿、公、が、奸、曲、を、その、罪、放、し、が、じ、と、い、う、も、賞、を、べ、れ、る、ゆ、え、は、し、も  
 あ、れ、故、い、う、か、と、か、れ、が、彼、の、孫、を、王、子、と、號、り、南、風、原、の、城、を、籠、り、て  
 六年、が、間、山、南、者、と、り、も、あ、れ、れ、が、こ、そ、民、今、お、天、孫、氏、の、後、跡、を、と、る、と  
 り、て、曝、雲、逆、意、を、振、ふ、と、い、う、も、竟、は、山、南、と、奪、ひ、ひ、き、り、し、その、功、一、つ、  
 又、為、朝、う、身、に、その、當、初、阿、公、が、紀、平、治、り、地、圖、を、贈、り、し、こ、と、な、く、が、繼、  
 君、父、の、命、か、り、も、輒、く、こ、ろ、ふ、潜、ひ、ま、り、て、跡、を、捕、獲、て、あ、ら、ん、や、その、功、  
 ニ、つ、よ、り、て、阿、公、が、亡、骸、を、跡、龜、あ、れ、ひ、き、き、を、べ、け、れ、が、幼、稚、れ、あ、ら、ん、死、と、も、  
 葬、り、て、跡、吊、り、し、と、叮、嚀、お、説、諭、し、ま、る、が、跡、龜、の、容、を、あ、ら、ん、死、か、く、ま、

深し恩恵は情りなほかどかれと某同胞へ祖母阿公は傷らるるあれ  
律を考れその罪脱まじに免を蒙りて腹を切らんぬといひ  
咄々び自殺せんとすを舜天丸急ふ推禁も迷へるお鶴亀汝達その  
とく免阿公を外祖母ありとて絶てあられあられ故ふこれ傷く  
則孝子なりゆくてその祖母ありあられ至りてみづら罪ふ死んとは星  
刈頃孫ありかれハ罪ありぬれ罪はしとていふもあふ道理をつくま  
可惜玉瑾ありが如くんあられ目今同胞の頭髪を剪てその死よ代る  
孫を替れんと庶幾阿公が死も拘死ならん孝子順孫の志も強て奪  
母玉とくぐりて刑罰と刃と抜て於龜の鬚を忽地井と剪捨する  
兄も弟も為朝親子の仁慈お感涙禁めくも陪とみづらありの孫と  
救ひよとれ紀平治が救ひまきとあられれて今と限りの阿公におは

あひふ骨と合し彼首是首と伏拜む若痛さこそと八町礮が臨死  
とくえて刃を刃小頭をうち落せば是期はあても今さらふあ  
の闇お夜の鶴細輪の田井お鳴く龜も共母焼うとひあり  
お阿公が麾下の野伏東紀南吉堤造紅衛水の數十人古廟の背  
より立ち出て地上に拜伏し某お元来名もなれ仇武者あひり  
らも曩々大將軍に後ひあり長川の敗軍も辛くて必死と脱れ  
ののどもあり大將軍は夫婦のらくらさうと軍師先鋒の両将も  
討死しあひぬと安んじふこの城山へ腹れ入りとうらはも阿公が王子  
を冊れて鬪鏖樹谷お隠れをる名吉おひ王子お後ひしり  
口を鯛のあはしなくて山客野伏とるなりてゆひまきあられ目今山  
崎よりありあて阿公が今般の懺悔物とるを竊せしてはめて王子ハ

春風記 長月合貴書月一 夫と云ふ日

尚寧王の子なり。されはしを覚り。且大將軍玉女のりとも。恙なく  
 眼にまを眼前にせしむる。天の明るやうにあらせしと説く。く  
 おそく。まをせし。く。為朝ひとり。く。おその名を同く。汝もせしめ  
 る。は。先鋒の大將鶴亀を。あ。さ。る。と。や。あ。れ。あ。ら。う。お。その。夥計  
 なる。宜壽平朝安策とやう人の三人。甲夜。と。龜。と。生拘。めて。阿公  
 の。首。を。刎。んと。ま。り。し。の。い。く。ま。や。逆賊。嚙。雲。を。降。せ。し。と。て。  
 ぬ。く。山林。に。脱。走。王子。を。後。ひ。て。國。の。為。忠。心。を。盡。す。め。似。を。三。口。と  
 行。ひ。と。齟。齬。され。ば。その。疑。ひ。あり。と。う。ね。に。し。と。宜。へ。ば。お。り。う。と。も。ゆ  
 頭。に。握。仰。り。に。め。ど。も。件。の。三人。の。故。朋。輩。に。め。ど。軍。師。陶。松。壽。の  
 郎。當。あ。て。替。り。ら。れ。し。め。の。こ。と。て。九。日。む。り。以。前。お。この。山。に。す。め。て。  
 阿公。を。後。ひ。め。ひ。れ。と。回。答。せ。し。う。ば。為。朝。の。松。壽。と。え。え。り。陶。松。壽。の。こ。の。

の。め。ど。も。と。認。り。や。と。同。ま。あ。松。壽。は。は。り。ち。う。く。ま。り。て。件。の。死。骸  
 を。熟。考。て。一。切。認。り。ゆ。ら。と。い。ふ。と。お。為。朝。を。一。層。の。疑。念。次。は。て。め。ひ  
 定。め。り。ゆ。い。人。の。舜。天。丸。に。ち。父。の。氣。を。と。猜。し。つ。が。大。人。い。う。お。お。を。  
 中。人。阿。公。年。ま。ら。に。歸。れて。ひとり。王子。と。衛。守。又。近。属。長。川。敗。軍。の  
 落。武者。と。招。れ。集。る。と。ま。も。嚙。雲。を。あ。れ。る。と。い。ふ。り。つ。軍。兵。を  
 遣。し。て。捕。縛。せ。ん。と。も。せ。ら。う。や。あ。お。彼。つ。父。の。名。を。借。て。王子。を。阿。公。を  
 殺。し。彼。亦。王子。の。為。兵。士。死。起。し。つ。が。父。を。討。と。稱。し。愚。民。を。惑。を  
 謀。な。げ。し。あ。う。く。平。朝。安。策。亦。嚙。雲。が。間。者。め。て。松。壽。の。私。卒。を。と。  
 流。石。に。事。り。破。れ。お。及。ぶ。と。も。陶。松。壽。と。つ。が。父。を。疑。せ。ん。と。お。お。し。さ。ん  
 付。く。に。や。と。宜。へ。ば。為。朝。や。う。や。く。お。曉。り。て。う。ら。点。以。舜。天。丸。が。推。量。その  
 越。を。ひ。り。死。骸。を。展。檢。よ。と。仰。せ。れ。ば。松。壽。と。ま。も。よ。その。懐。疑。

揮りつる鱗形の割符あり。加以その身甲も矍雲の袖藏と著しければ。爰皆駭然として舌を巻いた。舜天丸の聰明睿智を感ぜられたり。なりけり。當下為朝の東紀堤造亦が忠義の志を失つて。あつたなり。ついでに賞して夥計の野伏いくむくわれを同多人の東紀ホ答まらぬ。今ここのゆりの僅ふ五十八人この餘國吉奥山るんどお懸れする者二百五六十人もゆべしといふ。王女これをみてぬく。按司この宮社お詣り。ついでに環會又招うじて三百人の兵士お召し。天孫氏の冥助がれ下。祝いの入へ為朝古廟とや。拜々人誠あるとれた。禊ぐはも神あり。あられお夥血と流して社頭と穢せしめ。かとし紀平治路。龜ハ王子阿公ホが死骸を瘞て。その汚穢を除け。陶按司とて。是れ代りて。よあどびの幣と進じし。人今や天も明ると。た。り。れ。と。

王女舜天丸を招て。直に關鑿樹谷へ赴れ。阿公が隱室あり。各位が俊をたのり。さへとて。躑々徐ゆる。階の板をやり立ち。ひて野伏十人を。と。ぎ。て。社頭の鮮血を洗ひ流さし。東紀堤造亦は。導はして。親子二人のりとも。關鑿樹谷へ赴れ。人へ。天と。わ。の。ぐ。と。明。け。り。

第六十五回

賊將を斬て。林太夫兵糧を贈る。靈箭を發て。舜天丸矍雲を射る。

為朝親子ハ關鑿樹谷へ空廬入り。且くして。紀平治松壽。誘電と。十人の野伏を招て。さ。み。り。う。と。も。に。ゆ。り。す。ま。み。り。此。日。の。朝。を。東紀堤造亦を遣して。夥計の野伏亦を招じ。多や。四五日。が。不。ど。や。さ。の。城。山。へ。さ。り。取。り。ひ。う。ば。その志を賞美して。一脯の肉。一。枝。の。果。も。士卒。お。さ。り。さ。し。り。人。へ。その仁心。お。感。佩。し。て。銳。氣。に。じ。め。め。り。や。ま。し。

かくて為朝親子ハ紀平治松壽將龜本を集合してその軍略ハ同  
多クハ八町礮まづちうの母う。マダ君俄頃ハ三百の兵士と好多人と  
矇雲が賊兵より比見。さる九牛が一毛なり。且この山を首里へ近し矇雲  
ちやくあれをちうん飲先まるとん人々を征し。後々となん人々を征せ  
らる。思慮ハ費はふ違ひ。三百餘騎を二隊ハマうち大里真和志の  
山間より長く驅てふく進。短兵急攻多ク。備はれ賊の軍兵一  
戦ハ滅ぶ。さうく軍配ハ多くと。さうめさうせん松壽ちうく尋思して  
老人の異見そのはしあれお似れども。賊ハ大勢それハ小勢進退嶮岨を  
憑とも急ふハ首里へ攻入り。さうく入。西陣相挑む。さうくハ何をりて  
兵糧は給べき矇雲ハ。マダ士卒の餓うるをみる。とあふん兵とさうく  
背より襲ひ替んかくてハ始終の 善策ハあふん。只この山は屯して

首里を攻入とを執しを示し。敵ハこころを圍して矢戦は日をおく  
その隙ハ大將軍ハ百餘人の選兵をばて。溜まり山越して浦添の城を抜  
多ハ矇雲前後ハ敵を受けて防がふ術なう。人飲よく質を廻さる  
さうりや。と憚る。さうくもさうく。さうくハ為朝つぐとさうく。さうくハ  
易く退くハ難し。舜天丸ハ何とさうく。さうくハ同多人ハ。さうくハ陶松壽の計策  
さうくハへくともさうくハ。さうくハ山ハ。母君を大將とし。陶松壽を軍師と  
ちて。兵士二百餘人を残り。さうくハ為朝この山は屯して日さうくハ首里  
ハ攻まればと風声。さうくハ矇雲ちうくハ多勢をりて。さうくハ攻むとさうく  
なれば。その隙ハ。さうくハ父ハ。舜天丸。紀平治。鶴龜。亦と。百人の選兵と  
て。竊ハ東の山路を獲り。出備。さうくハ討り。浦添の城を獲。易く。人々  
回答多人ハ。為朝この後。さうくハ。王女松壽を大將とさうく。東紀。坂。遠。水



春兒乃長月合道月

珠鱗を替  
紀平治  
磯を離し七

亦記三張月拾遺篇下帳卷之四

〇六



二百餘人を残し、つらね、つらねと御導とし、為朝父子紀平治、八浦添  
 を取らんとして、百人の兵士の弁嶽の麓へ入り、あんとて、その謀を説き  
 て、二人つ起行し、翌日為朝父子主従いと、寡しく打拵て、山や  
 あぞ、ちり出さふ。さう行ふ陶松壽、紙を継て、旗とさし、竹を剪て、矢を  
 射し、山中要害の地、陣を布て、夜、駭く、無と覺し、為朝、あつて、  
 城山に我兵を起して、首里と攻るといひ、しり、れ、の、矇、雲、こ、の、風、声、と、  
 大、兵、に、驚、れ、棟、孫、奇、律、之、全、廣、ホ、以、下、の、賊、將、を、  
 の、火、攻、め、為、朝、三、百、六、臂、あり、とも、脱、れ、  
 ざり、か、は、あ、つ、く、公、お、か、つ、く、  
 招、れ、集、め、既、に、城、山、に、屯、し、て、攻、め、  
 な、し、け、れ、  
 十月

為朝夫婦が存亡定らざるに比より、その往方とあらんとも。こが  
 千里眼を聳ととも、雲霧などの掩ふやうな、  
 術、折、く、や、あ、らん、か、  
 小冠者あり。又八町礫とつらね、  
 漏ししとと説きせば、両箇の賊將ら、  
 次の日首里を軍隊して、長川をうら渡り、  
 松壽の陣の声、  
 下知して、一度、  
 賊兵、

打殺さうりりの二三十人傷けられり。その数とてんたす八町  
礫よといふ程こそわれ大軍一崩れ落ち一里のまじり退れて  
西二日の起りざるの多う。棟孫全廣ハ為朝の軍配悔ひ  
とれぬ舜天丸の智謀紀平治が礫よゆあらしめてその後まかしく兵  
をさうゆべ山中珠は露あうて敵の多少をえ極めか。岡の声の  
礫よ答て数千騎を殺るがごとくけえし。あましく首里へ逃馬と飛と  
加勢の兵と乞よけれが礫雲はて安くぬるうね。いせやうんぶら  
馳向ひて暗法人といれさまて。あうて出陣の准依とぞあうりる。かじ  
行よ為朝舜天丸の紀平治鶴亀りうともよ夜ゆれ昏の宿り。中  
弁嶽の麓まで来りひく。主従石尻をうけて跡より走りあう  
兵士とすらまふ折ら。忽地行馬は鞭をわけて北より南へ走りて

ののりけ。舜天丸これを目送りて彼騎馬の山南首へ急と告る使者  
なり。引捕へるが縁由と。あうりもあうべれあて宣ふと為朝の  
あへど。あうりもあうべれあて走れ。走れと送憾と叫れ。あうり  
紀平治つと身と記。其勢とあうりんと。いひゆけ。礫を把く礫  
と勢は。や五六町も走りこるとおがした騎馬武者の脊骨と摧れ  
て鞆壺より。仰さぬあそ落れ。あうりもあうべれあて現も祖又とハ  
町礫と渾名せしこと空。あうりもあうべれあて奇なり。妙なり。と稱嘖。同胞一奔  
走りゆれ押へて索を被る。馬の頻り小驚れ。あうりもあうべれあて舊来一踏走り  
かこれ。舜天丸馳て礫と引とえ。その馬とま入獲りひけ。その討  
亀ハ半死半生の騎馬武者と引立てまう。いひま。為朝。あうりもあうべれあて  
その来歴を責問。あうりもあうべれあて彼者苦痛。あうりもあうべれあて堪ざりけん。あうりもあうべれあてくハ回答

せざるを。あづく。同れて。已こと。其の浦添の筑登之。珠鱗と。呼ぶ。り。のるる。八郎。為朝。再生して。城山へ。痛我り。目今。合戦の。最中。なる。浦添。宜野。湾の。両城。へ。首里の。咽喉。なる。りて。と。兵士。と。加。由。断。なく。と。噂。雲。法。王。下。知。り。の。浦。添。の。按。司。伯。紇。某。を。使。て。佐。敷。の。按。司。を。催。促。し。加。勢。の。兵。士。を。呼。び。聚。る。の。こ。の。舟。舫。仔。細。ま。し。と。い。ふ。為。朝。果。て。冷。咲。ひ。それ。ど。も。使。け。が。遠。奴。は。用。戸。し。身。の。暇。を。と。り。せ。よ。と。言。ふ。へ。ら。け。ら。れ。と。回。答。も。あ。く。そ。紀。平。治。が。閃。と。刃。の。下。に。珠。鱗。が。首。へ。膝。の。ひ。く。ひ。へ。撲。地。と。落。軀。も。共。に。倒。れ。り。浩。然。と。南。吉。紅。衛。ホ。百。人。の。兵。士。に。二。三。人。つ。走。著。て。その。日。の。中。に。小。集。合。し。て。為。朝。と。い。ふ。謀。を。脱。示。し。百。人。が。中。を。殊。に。珠。鱗。に。似。る。を。擇。と。彼。が。衣。裳。に。被。せ。て。馬。小。乗。し。為。朝。父。子。鶴。亀。同。胞。紀。平。治。亦。と。筑。登。之。小。打。扮。て。主。後。と。い。て。

百餘人。只。管。道。を。い。そ。ぶ。つ。その。夜。亥。中。の。比。及。よ。浦。添。の。城。に。走。着。件。の。假。珠。鱗。を。先。お。と。り。て。城。門。を。敲。き。佐。敷。より。加。勢。の。軍。兵。を。誘。引。し。ま。り。門。を。開。き。て。入。れ。ま。し。と。言。ふ。城。の。兵。城。樓。の。挾。間。より。入。る。こ。の。こ。より。遣。した。使。者。珠。鱗。の。馬。を。乗。り。月。下。に。ま。り。疑。ふ。べ。う。も。あ。ら。ざ。れ。ば。適。之。城。門。を。推。開。し。て。諸。軍。兵。を。招。け。入。れ。り。為。朝。父。子。に。既。母。一。二。の。城。門。を。越。り。入。り。城。の。大。將。按。司。伯。紇。出。迎。へ。んと。する。折。ら。城。中。俄。頃。に。騷。々。と。佐。敷。より。兵。隊。誘。引。来。る。使。者。の。珠。鱗。の。所。持。物。の。由。由。と。い。ふ。を。呼。び。つ。れ。伯。紇。大。に。お。ど。ろ。お。ど。ろ。と。走。り。入。ら。んと。す。る。処。を。為。朝。刀。で。引。抜。ま。り。跳。り。鬼。て。伯。紇。の。首。を。丁。と。撃。つ。大。里。の。按。司。源。為。朝。こ。の。あ。り。城。の。賊。兵。命。惜。く。降。を。あ。せ。よ。と。喚。り。多。く。の。後。卒。百。人。関。の。声。を。仰。り。け。辭。大。丸。紀。平。治。鶴。亀。の。旗。横。を。見。守。り。破。て。廻。れ。り。城。の。兵。士。驚。れ。騷。々。と。防。に。戦。へ。

とさるりの一人もなぐ。半の後門より脱れ去り、弓を伏兎と脱阿容  
 阿容と降とあり。かくて為朝父子浦添の城を隠し、あはし遠近ふ  
 えで越来の甲橋乙柚丙烈丁炎春が徒二十餘人の獵夫をおく、あり  
 加りよければ為朝の属兵百二十餘騎降とふの兵をあしして四百餘騎  
 とぞせえし。あつた城の中兵糧乏乏しをりて龍城公りとなし。り  
 宜野湾の賊將替て出遠く囲て日次さる。城中戦どして弱たじ。  
 ぐや昔麥を刈らして兵糧供給せんとす。りりのめれど為朝の  
 騒ぎさるる氣々もなぐ。今一兩日とまへば兵糧おのづから出するべしと  
 宜ふを衆皆さるるほぐさく。あつた遠見の兵忙しく。城樓より走り。  
 宜野湾のさるり。軍兵夥出ると告ぐ。為朝の舜天丸紀平治と  
 とつ小城樓お登りてこれを入る。あつたその勢あつて二三百人数十輛

の戦車をひきて、葛直ふとせ。あつた。為朝を志し、截て、叫と  
 うら笑ひ。あせまるりの敵。あつた。佳奇呂麻の材大夫兵糧と贈  
 するなり。これ亦活と。あつた。果あつた。嶋長材大夫。あつた。涼際  
 お走り。あつた。これ佳奇呂麻の兵糧と進とせんと。海温乾魚。あつた。  
 を夥齎し。あつた。材大夫の。大將軍に稟させ。あつた。あつた。あつた。  
 曩お王女の佳奇呂麻おとせ。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 認りつ。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 三百餘人おのく。藤蔓を編く。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 為朝父子の城樓と。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 送り。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 志ぬれを祝。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。



旨めれば彼処は兵糧の貯せざれば只月くはあふより士卒の月俸を  
 送り遣へば今はその糧竭つるより。只彼城をうら圍んで日とるさへ  
 為給智勇ありといふも。餓死せざるやいんか。かれは城山の敵へ心腹  
 の病よみ。は為朝へ浦添の城のあること疑ひはし。いせや。れ浦添と攻  
 へば城山へおのづから落べりて。さぐ縛の越を株孫全廣に告あひ。孫  
 と長川を前よめて。城山の敵を押さるるより戦を催せむら。全廣  
 へや。首里へゆりて浦添へ向ふ。さういつりけり。かくて全廣へ日  
 は首里へゆりゆれば。喉雲やうて全廣を先登の大將と。奇律之と後陣  
 と。し。その牙へ中軍あ將として。その勢をえて二千餘騎既。龍宮城へ進  
 んだ。後。次の日龜山の麓に至り。且くあふ屯て敵の中りと撈回する。  
 間者走り入りて。さへ。まても佳奇呂麻の嶋長。林太夫といかりの

豫て為朝よをよじて。彼此の嶋人をか。ら兵糧夥運送して浦添  
 の城へ入る折。宣野湾の大お季蛇。これを遮り駐んとして。却嶋人よ  
 と。告め。又斥候走り入り。為朝既。兵糧を獲て。勢。朝  
 日の昇るがごとく。六百餘騎を二隊ふ。ま。城。お。  
 り。こ。呼。る。は。忽。地。前。面。の。茂。林。の。中。より。一。軍。の。人。馬。馳。出。り。  
 喉雲の。の。報。知。を。傳。へ。彼。処。の。敵。軍。を。へ。て。心。の。中。に。大。に。周。章。車。を。捨。て。  
 馬。よ。り。騎。で。ま。り。陣。頭。を。馳。出。て。前。面。を。借。と。と。わ。せ。お。和。軍。忽。地。  
 左右を。う。り。て。お。か。り。さ。う。う。う。う。う。十四五歳の美少年。真先。馬。乘。と。さ。  
 麾。把。て。喉。雲。を。さ。し。招。お。女。賊。さ。と。て。あ。つ。る。の。邊。に。や。は。れ。へ。定。着。和  
 の。後。胤。結。西。八。郎。源。為。朝。の。嫡。男。舜。天。丸。九。年。孫。姉。巴。嶋。は。漂。泊。し。て。近  
 屬。父。母。ふ。再。會。し。更。お。この。地。へ。伴。り。れ。され。父。の。命。を。願。て。將。を。討。て。誅。戮。

賊逆劫掠の罪と糾して嶋袋の死を雪め民の塗炭を救んとて刃を交  
 へし。馬も人の士卒ひしく腹を敲れて鬨の声を咄と揚天照皇太神宮  
 界山正八幡宮阿蘇明神と写し三條の白旗を山風吹巻の猛將  
 虎卒敵百人前後左右陣列し舜天丸の側あり白髪一騎戦  
 を横へえまゝりたれ。これぞこの音の聞八町礮の紀平治大夫と聞給も  
 あれ勇士の相貌體の威も日本様真ふ一人當千の勇敢まきこみあ  
 くれり。あれども霧雲の舜天丸の少年なるを悔りて呵々冷笑ひ  
 黄口孺子が耳置れ銭言りお汝が父為朝とふれと雌雄を争ひ  
 ぞ猛火お包は孤島お呻吟ひ死んとせられたり。ひたりんけりて生  
 も死するのあよなれ幸ひあるべし。又このどぬお虎の鬣を拵んとく人  
 もさしめし。小冠者に先とせし生ごひりた白徒なり。

誰ある。舜天丸と生拘れ。鞞壺敲て敦團の霧雲が先登の大將耳目官  
 全廣忽地馬を馳よとれ。紀平治も又馬とすめて逆さうあて十合  
 あまり刃と打て逃走れ。全廣の馬は拵れ逃さじと追かくる間とせりて  
 紀平治の刃と反りて丁と礮礮ととも全廣の馬より撞とつひ墮て血  
 を吐くと駭。賊將奇律之これをもて渠全廣と助よと叫びつ。士卒お  
 先がら馳出が又紀平治が狙礮礮眉間を打碎且馬より真逆さぬ  
 お波び落れ。南吉紅衛林大夫お群とと流うさるりて全廣奇律之  
 が首級を獲り。されば紀平治が子煉の礮お霧雲が憑きまゝに賊將  
 二騎を移りて義兵の威勢破竹のどく大將旗をさみり人ば賊軍  
 勿心地足を乱して一礮お崩れ駭げ。霧雲まきこみあは慌て頻り  
 唱とども。幻術破れて験なし。さそもいふ。とれあもあを忙然とす

さる所を去らば。浩如。矇雲が後陣ふらびきめれて敵を背より責  
めると叫ぶ。野の声夥しく。長川の賊軍敗れて賊の大將棟梁  
は。王女をさらし。龍宮城をも攻めし。矇賊が追て  
推よし。東風平の按司陶松壽にあり。名告かけ  
潮の涌がごとく攻られ。矇雲前後に敵を受けて禦ぐにさす。矇雲  
自身をこもかく。且戦ひ且走れ。朝岡のほとり。亦一軍の人馬  
馳せて落ゆ。途を遮り。苗八郎が朝を忘れり。や矇賊逃して脱べ  
と叫ぶ。雷の如く。矇雲進退既に究り。是非を破りて走  
脱んとせ。為朝の陣中より。鶴亀同胞馬を並べて逆とて。甲橋乙袖  
丙烈丁炎春ホ。又左右より。挟んで脱せ。と攻撃と。火の然水の流るる。似  
て又背より。王女の大軍追蒐す。前を飛とる。雨の如く。あまを

賊兵亦或は替れ或は驅隔られて矇雲只一騎よかりし。為朝遙に南を  
揮舞ふ。射て落さんとて。二所藤の弓の握り太るるに。鷲の羽の征天ら  
刺し。此の死の上を引ひて。あまに堅めて。丁と射る。その前あやま  
矇雲が胸板せり。礮と射る。鉄砕けて飛散る。為朝ハ一の前射ら  
缺が。馬を。取て。馬を。彼此は。乘廻り。矢壺を。潜を。数回。あまを。射  
あまも。前を。みり。て。敵を。たぐ。上差の。征矢。二十四。條を。ま  
あ射捨多人。弓投捨。嘆息。され。總角の。むじ。より。弓。前。みり。名  
を。ま。れ。實。よ。甲。多。り。も。前。面。に。敵。を。射。て。あ。ま。と。い。ふ  
し。され。鬼。が。鳴。あ。中。引。の。巖。を。射。て。碎。れ。大。鳴。あ。數。百。騎。乗。る。  
兵。船。を。射。て。沈。め。り。縦。矇。雲。が。五。體。鐵。石。を。り。て。造。る。も。前。の。ま。さ。る  
こ。ま。の。あ。ま。捕。お。せ。んと。焦。燥。て。馬。を。馳。よ。せ。んと。あ。ま。の。防。飛。へ。忙。し。



その雲を牽ぎてえさのわくしれに拳劬うか。鶏を割ふ刀次りら  
 へうの老賊不測の妖術あらん。大将おん手とくばしりひて、不虞の  
 てあふ。後悔其知たらざらじと理をばりして練へる。為朝と盡を  
 切て拳を握てぞとじし。鶴龜ハ為朝のちひとまよりさあやせて  
 諸軍を激し。鶴直小亦。驟雲お替てかれば。驟雲更に敵をえり  
 まうと。六尺のまりの金撮棒を。水車のおとく揮きして。よせの敵を打  
 けとふ。或ハ目子お替て首軀へ滅びるのあり。或ハ骨碎け。腦黄お替  
 りのありて。矢庭お替殺さる。兵士數十人。その疾と電光の如く。一朶  
 の鳥雲。驟雲が頂の上お掩ひて。どり、その姿を隠し。前おあるとすれハ  
 忽然として後おあり。越来の甲楯乙袖。徒園場の東紀松川の南吉  
 隊おのく。跡痕負さるる。志くれども。括龜ハ一歩も退るを。園の乃

あは君の仇家の為。お父母の仇。こゝお怒を望めど。つれの時。期を  
 らせとて。嘯叫で戦へ。王女松寿又後方よりよせ。あは奮怒。空戦。肘に  
 うつせども。驟雲まも。猛く狂ひて。右を替て。左は當り。前。柱。後を  
 拂ふ。身方危く。こえし。為朝ハ堪うて。みづら。勝負。は。せんぞ。馬  
 の足掻を。と。え。あ。左。右の。岡を。繞。り。お。舜天丸の。一。陣。走。め。馬  
 せ。お。八。町。磔。の。紀。平。治。あり。王女松寿。り。り。も。に。二。人。の。孫  
 驟雲に。怒。怒。さ。ら。と。て。此。も。擬。後。せ。と。三。尺。の。太。刀。抜。う。じ。四。騎  
 が。間。へ。ま。入。り。て。刀。尖。より。火。を。お。命。う。れ。り。と。戦。え。り。その。隙。は。為。朝。ハ  
 さ。あ。活。と。び。び。え。る。鶏。の。丸。の。宝。劔。を。ら。ち。振。て。間。ら。く。走。り。へ  
 宝劔の威徳。よ。あ。それ。ん。驟雲。猛。風。を。起。し。雲。は。ひ。て。空。中。へ。登。り。人  
 と。よ。お。舜。天。丸。ハ。姑。巴。嶋。を。三。所。の。神。お。奇。紀。に。挑。り。前。は。我。家。と

識れ黄金牌をとりそえつ。弓と満月のごとく。誓固めはやく祈念し。は忽然として白鳩兩翼を旗竿の上へ翔とふまひ。何処にやぶく空中の鳴声。父兄しぐ念願成就とのりく。弦音高く兵と射る。その箭は。星のぞく。矇雲が吃碎て。霞がうらみと射し。まへへ。志じり堪。馬より。仰きある。控と墮為朝。はらりと馬より。花より。彼空剣を。まて九刀刺徹し。怯むところを。押伏せ。首と佛と搔落し。まへへ。天候。結陰。大兩盆を覆とがごとく。四面野于玉の圍となつて。志じり善悪。つろざりのけり。

第六十六回

龍宮城に三賢志を述  
夫婦塚に兩児誕生を

この日舜天丸の。おりの。音ありとて。兩具を。鞍齎し。まへへ。駈。兩降

そぐと。し。人。ご。も。瀟。ろ。め。の。な。り。け。り。そ。の。と。れ。為。朝。へ。舜。天。丸。お。對。し。おん。身。い。く。し。て。ま。兩。降。ふ。ん。と。み。あ。り。て。兩。具。を。准。儀。し。た。る。也。同。身。人。の。舜。天。丸。若。く。大。軍。の。後。凶。年。あり。大。殺。の。後。風。雨。あり。あ。れ。古。今。の。恒。言。く。い。じ。周。の。武。王。紂。を。斬。と。れ。孟。津。を。つ。ろ。り。ま。へ。白。魚。の。瑞。あり。紂。が。自。殺。さ。り。お。及。び。て。大。兩。盆。を。覆。と。が。如。し。足。化。は。し。天。聖。王。の。乃。お。祥。瑞。示。し。又。兩。を。く。じ。て。殺。戮。の。餘。氣。以。は。つ。る。な。れ。が。し。今。や。つ。が。父。我。兵。を。り。て。矇。雲。を。討。め。ん。白。鳩。旗。の。上。お。ま。さ。り。鶴。空。中。お。鳴。れ。又。大。兩。降。そ。り。て。殺。戮。の。餘。氣。以。淨。む。舜。天。丸。の。軍。中。か。つ。ら。に。矇。雲。を。斬。ら。ん。れ。と。み。あ。る。故。お。兩。具。を。齎。し。て。回。答。め。ん。為。朝。王。女。い。く。が。ま。い。士。卒。こ。れ。を。き。く。り。の。その。才。以。稱。噴。せ。が。れ。な。り。け。り。且。く。し。く。兩。敵。飛。云。西。丹。あ。ら。れ。ば。主。従。ら。ら。聚。ひ。て。矇。雲。が。死。骸。を。つ。ろ。り。の。の。え。ま。

新編 源氏物語 中巻 二四

By the emperor, Yamato no  
Chononjo no Kuni

春分月長弓合戦



諸神の権護  
よんて 喉を  
頭を投

春日月長弓合戦

人倫ありあかき。その長五六丈可なり。龍をまてありは。琉球二顆の  
珠をへ腮の下にあり。と見え。珠の傷口より出て地上にあり。鱗を半  
輪の月をうち累され。凡の大船の錨児のごとく。眼は百煉の鏡の  
あく。血を染る。盆のてら。全體堅くして鐵の柱の如し。衆皆これ  
えて駭然と驚れ。怪に暗をよし舌を吐て。怖る。の又多く。當下松壽  
とて。出て。為朝親子。亦亦とる。縁故を推し。大古天孫氏に。て  
この國も王とし。これ毒惡の巨蛇あり。変化通力。強なれば。民これ  
乃。毒をせ。これより。國の名を龍蛇と。り。天孫氏。件の蛇を殺して。  
民のあふ。毒を除れ。且その珠を獲て。これを琉球と。名づけ。後遂。小國の  
名と。せり。され。珠を獲る。地。王城と。唱。蛇の骨と。埋。と。蛇と。は。死。  
舊。蛇山と。いふ。高嶺。是なり。天孫氏。嘗。言。さ。く。く。蛇。は。足。つ。が。國。の

大の。冠。なり。子孫。り。奇。と。好。む。の。の。り。て。彼。蛇。墳。を。毀。う。が。君。徳。  
これ。より。衰。く。ま。く。國。家。と。失。く。る。と。く。これ。小。琉。球。の。北。濱。る。る。  
赤瀬。は。碑。石。を。立。て。後。に。國。難。あり。と。い。ふ。と。も。この。碑。石。は。祈。れ  
り。の。禍。を。脱。ぐ。べし。悲。し。ふ。不。徳。の。君。國。を。失。ふ。と。れ。及。び。て。東。方。は  
日。輪。あり。朝。日。出。て。つ。が。國。の。乃。照。さ。ん。努。力。め。と。定。せ。し。は。廿。の。日  
碑。も。傳。く。と。り。あ。る。は。尚。寧。王。奇。を。好。こ。ま。の。あ。ま。り。蛇。墳。が。發。れ。禍。獸  
を。招。けて。これ。が。崩。れ。ま。い。王。女。ま。づ。ら。赤瀬。の。碑。を。祈。り。て。禍。獸。土。中  
を。滅。せ。と。い。ふ。も。矇。雲。中山。は。跋。扈。して。遂。に。南北。省。を。吞。ま。至。れ。り。か。こ  
を。矇。雲。の。往。古。天孫。氏。を。殺。され。り。蛇。の。り。て。疑。ふ。べ。う。に。その。怨。靈。の。海  
に。び。び。枯。骨。十。千。載。の。後。甦。生。して。舊。怨。を。報。へ。る。な。る。ん。且。天孫。氏。の。言。  
言。を。以。て。い。ふ。と。れ。東方。は。日。輪。あり。朝。日。出。て。つ。が。國。の。乃。照。さ。ん。と。い

今日こんにちのふりかゝるべし八郎やちろう按司あじの大東おほひがしの皇孫みまろ日の神ひのかみの後裔あとのうらなり朝あさも出いてつが國くにのふ照あてつるはの一句いっくも則すなはち為朝なすの二字ふたごこりたり。あつるは天孫あまのみこと氏うぢの子孫こゝろも代かへりてこの國くにを治さめまふべし君きみと大將軍おほしげん父子ちちこもこそと信まことぢして古いにしへを推おして今いまも既すで且かつ一ひと二顆ふたたまの珠たまを拾ひろひとりて為朝なすも進まらされむ。為朝なすこれを受うけまらむ世よの浮説うきせつの信まことにたがじ陶按司たうあじもどしその珠たまも預あづかりおもひとて室むろひていろに勸すすむどもも採とりまらざりしは松壽しょうじゆの力ちからもよづべ戦袍せんぱうの袖そでを刺離さしりく珠たまを押おしおめて遣はなの上うへも負おねかかつて為朝なすの樹きを伐きして薪まきとむし虬みづうみの軀みを燒やしまつて猛火もうかの中なかもありあらら。その皮かわも燒やされらせんまらるるまらら中なかへ引捨ひきすせまららああ奇あららるるな虬みづうみの軀みも旭あすひも霜しものごとく忽たちまち地ちも腐爛くちれ骨ほねもどどめど米水こめみづとなりて失うせかかが衆しゆ皆みな再またび驚おどろれ怪あやまてその故ゆゑとあるりのは。

舜天丸しんてんわつりくと見えたりして。こゝろこゝろ怪あやままららびこの草蛇毒くさへびどく又解またげその功こうあれは虬みづうみの軀みの解げされらるる。この國くにもも野のある牧草まきぐさの名なもも何なにといいふふんと同おなままああ羊老やうらうとと兵士へいしも終つひて絶たりゆゆとといいふふ王女おうにょの且かつくヨ守よ思して舜天丸しんてんわの鑿定くわんていそのはじあり。つが良人りやうじんの武德ぶとく天地てんちも動うししるる。祥陽せうやうも又多またおほく。さればこの草生くさせいももままらら蛇毒へびどくを治ちめめるるやああんん試こころみおお嚙くは雲うんも傷きずけられられ東紀南吉とうきなんきち甲橋かへし乙柚おつゆもも瘡かさ口くちへ著つけけててここんんよよと宣のたまひてその草くさを摘採とつして瘡かさ負おるるりのも賜たまるるら立地たちぢも其その瘡かさ愈なりり苦痛くるしみ拭ぬひ去きるるら如ごとくなれは皆飲みなのむひてまららししるるははいいせせへへののつが國くにもも蛇類へびるい七種しちしゆあり。蝮蝎まひりの殊ことも大おほなるりりのの羽夫はぶと唱なふ頭あたまももああるる尾お短みぢし。この毒蛇どくへびも螫さるるりりののああるる活いきををよよりて土俗どぞくの如ごとくくもも羽夫はぶはは活いきももああるるといいふふ。ああるる今いまゆゆりり形かたちかかるる冥草めいそう

ハツ草の  
事羽羽袴  
の説ホキ  
かして作者  
の考義

の生おひき物ものも。なぐくなぐく蛇毒へびどくと治ちせんる。こゝに足あし大將軍おほしやうげんの親子おやこの仁徳にんとくよりの  
てなり。いと愛あひじと祝いわしもうせん為ため朝あさこゝろこゝろ流ながまげふらち笑わらみて。世よの  
常とこ言ごとは南みな中ちゆう殊じゆは恐おそるべの甚たくハ毒蛇どくへびととり。今いまこの草くさのせら  
る。つが徳とくの致いためあふに欲あつする。下しもの國くにの音ねのこ抑おさ毒蛇どくへびと羽夫はつとと唱なる  
よしハ何なにも根ねくもや。と問とはへハ松壽しょうじゆう甚たくも。反はん鼻びの轉てん統とうあり。といふ説せつ  
あれど附會ふくわいの言ことも羽羽はつはつハ即すなはちこの國くにの古言こげんあてゆ。と回わい答たへる。舜しゆん天丸てんわん  
小膝こひざを礮たうと拍ちやくそれあて多おほひあふることあり。つが日ひの本もとは縮しゆくの最上さいじやう  
るりを羽二重はつふたじゆうといふ言ことハ羽羽はつはつ袴はかまあて蛇皮へびかわおなごゝての名なも。白柿しろかき  
も又また蛇毒へびどくを解とく功こうあり。又また蛇脱へびだつの薪たきぎ著つる。を。あふはて物ものと者ものつれハ  
鍋なべはあれ釜かまもあれ洗器せんきと忽たちまち地ちお破やぶる。りめし。そのとれとやく芋いも殼か取と  
焼やくくべ。破やぶれられ鍋なべ因よて舊ふるのてく。うらむ。よく知しるよ。と宣のたまへハ。は。その

多おほ聞き得え識しを感佩かんぱい。是こゝより毎戸まいと一件いけんの草くさと植うゑざる。りのなぐくその名なも  
羽羽はつはつ草くさといふ言ことも。さう行ゆふ為ため朝親あさおや子の凱歌がいが三度さんど揚あげて。此こゝの頭あたまと百  
餘人よひんお扛か擔かし。あて龍宮城りゆうきゆうじやうお入り。又またハ中山ちゆうざん南北なんぼくの三者さんしやう三十六さんじゅうろくの属えき鳥とり也  
いふ。は。て。風かぜを臨まんで悉しつく降ふふ。と。さて此こゝの頭あたまハ妖賊ようさく雲うんと勝か織おて  
飲會門いんかいもんの外ほか面めんも。あ。さ。し。ま。つ。あ。親おやりの日ひく。堵との。じ。その後のち羽羽はつはつ草くさの中なか  
あ。葉はを。し。り。へ。件いけんの頭あたま立た地ちお銷しゆ練れんとる。ぞ不ふ思し識しる。か。つ。賊さく乱らん全ぜんく  
治ちり。つ。有あり。一日いちにち為ため朝あさハ松壽しょうじゆう紀平きへい治ち鶴つる龜かめ林りん太夫たふと。て。有あ切きの筆ふで次ついで  
集會しゆかいて。あ。ひ。つ。つ。の。尚なう寧ねい王わう陸弱りくじやくも。て。逆さか臣しん妖賊ようさく本もとが。乃なハ國くに妖よう喪さう以い  
も。あ。つ。り。今いま幸さいふ王女わうにょあり。つが。大日本おほにっぽんの古實こじつふ。よ。ると。え。と。女めつ。と  
し。ど。も。民たみの父母ふぼと。る。べ。速すみみ佐さ小郎せうらう。國くにハ王わうあり。と。あ。あ。と。さ。と。や。と  
宮みやへ。ハ。王わう女にょこれ。を。ま。も。め。の。人ひとと。顔かほ。は。行ゆく。席せきを。避さる。と。あ。あ。も。か。け。ぬ。と。を。

春丸九ノ長月八日貴子前ハ夫と云ふこと日

はえまふりのうね。まふらと舊の王女お侍らば白蓮姫の貞魂が。このま  
憑るはしん人もあれり。よしや形貌ハ王女ありとも。丈夫お諭く王位に即  
天地反覆されふ似たり。り強て勸めらるる百より自殺し侍らんとあり  
定ちて推辞めへ。衆皆寧ろ命を。王女の謙遜道理は稱りせたまふる  
大將軍の徳高く且先王の女婿ありしはせが。よく王位に即たまひ  
臣ホが心を安くしし人としりも果ぞ。安て高座に推登せんとあはり  
為朝と袖拂て頭をすら掉各位の勸めらるるが。本来の情愿よあは  
これハ日本の浪人としじめりこの國へ推渡て國難を救ひ栄利に謀る意  
はし君父の仇とれ平清盛を殺さんとて木原山の宿りを出水行より京師へ  
赴く折勿心地風波は船を壊れて士卒悉入水したれ。為朝ひとりこの  
國へ漂泊して寧王女の舊恩を報んとありぬ。嫌忌の中は年月を

かきり。や志を果すとふ似れど遂に仇人清盛を討つて。あてこの國の  
王となりて半生の歡樂よ。心を移さんや功成名遂て自退く。あは人の人  
お及ぶとも今より故國におまゐり。新院の山陵を。腹を切て忠臣の誠  
を泉下お盡とせ。千引の石ハおれども。これハ心を動さ。あはびし  
出べらば。と言葉を放て推辞めへ。衆皆怒り。お嗟嘆し。八郎按司と  
謙徳の君子ハ父の功をりてその子に譲る。例ハ和漢お多々。加之  
嚙雲を射ておし。多しハ舜天丸君の大功あり。臣ホこの君を立て國王  
と仰せらる。と衆議既ハ一決して。又舜天丸のよ。して高坐に推登  
せんとせ。舜天丸忽地氣を。を變て。あはね。あはね。あはね。あはね。あはね。  
父母上は在る子にして親を諭る。これハ夫孝ハ國の本。これハ位ハ  
親ハ諭く。不孝の子とならん。何をりて。民は教へ。慢と。か。と。

いふゆゑに先達... 父子相讓て... 紀平治班を  
さくみ出所位の... 人カをりて定め... 大殿日本へかへり  
まらぶ。あの國... び安うらじ。まじし張政... 國中を治め... 王位  
おのづから定め... ともゆらん... 大切ある... のお勸賞行... らうりや  
としく松壽も亦... 班をす... 出大將軍夫婦父子... 志づく謙遜辞讓  
ゆひて... えて王位... 即まら... 大將既母か... の如し。士卒... いう... 恩賞を  
臨ん... ひもかけぬ... も。としく... ば... 龜おも又この... 淺ふ... びて恩賞の  
沙汰... せ... らうせ... ば。為... 釣つ... と左右... せて... 功ある... 賞... 罪ある  
を討... らせ... ば... 國ハ... 一子日... 静... ぶ。紀平治... がい... ぶ... 意... 稱... へり。  
官... ひて... ち... けて松壽を... 越... 末の按司... として... 兼... て東風平... 領... じ... め... 鶴を  
中城の按司... として... 毛國... 將... が本領... 小... 郷村... 數... 箇... 処... を... は... 加... へて... 毛國... 將

舜天丸の  
名告りし  
中山世譜

と名告りし... 龜を... 外祖紀平治... 養... 八町龜と名告りして... 龍宮城  
の苗守... 紀平治を... 親雲上... として... 舜天丸の傳... じ... 林太夫... 佳奇呂麻  
を... らりて... 兼... て小琉球... より... 以南... 姑采嶋... 小... 至... ら... 七... 十六嶋... を管領... じ  
東紀南吉堤造紅衛甲橋乙袖丙烈丁炎春... 志... を... 荒登... 之... じ... 郷村  
一箇所... づ... くと... くら... ら... ら... へ... 王女... 中城の世子... 殿... 母... を... ら... して... 鶴... 傳... じ  
為朝ハ大里へ退れて... 舊の... じ... 按司... と稱... じ... 舜天丸を... 浦添の按司... と  
あて源尊敦と名告... じ... じ... ら... ば... せ... 仰... せ... ら... 松壽... 紀平治... 務... 島... 志  
為朝父子の官職の... じ... と... 昇... せ... を... ら... せ... ら... 國... 買... せ... ら... 按司... と... 稱... じ  
稱... じ... じ... ら... じ... と... 勸... じ... じ... も... 此... せ... ら... 後... ひ... じ... ら... ば... 衆... 皆... 力... あり... じ... じ  
く... 恩... 賞... を... 拜... 謝... じ... じ... 為朝... 親... 子... と... 居... 住... の... 地... へ... 送... り... せ... ら... ば... じ... じ... じ  
おの... 采... 地... へ... 赴... 人... と... せ... ら... ば... 後... 小... 林... を... ま... 身... の... 暇... を... せ... ら... り... て... 佳... 奇... 呂... 麻... へ



琉球の  
林太夫ケ  
天満宮の  
権護の  
水厄水  
厄を脱ぎ  
して昇る  
梅ざら  
ハ云々の  
神詠ハ  
満史余論

帰るとして為朝小稟々此度某嶋人あはれ泊の西濱として漕ぎ  
せし兵糧船風波のたふ沈むんとてあはれ折誰とてあはれ梅の氣を  
きて衣冠正した貴人う船の袖前へまわられまてええて風を立地  
軟死にせむもこね恙りたるをゆるしこれも亦去来の修験者おひとく  
濱岐院のおん使あありえいと奇しれまてふ有がこれ権護なりと物  
かされは為朝政を傾けてまは太宰府なれ天満宮の水厄風難を救せ  
まふがれはしこれ少くもこれ銘西ふありくは常ふ安楽寺の天満宮  
繪よりけりふ有一夕の夢お菅家枕上ふまありて  
いづくも梅ざらあはれとあれとあつての外さうねせ  
と吟じまてとんちりて夢のさうり介しよりこのまこれ梅をえれば  
かすらば拜せごとといふしこれあゆの意報なれへ天満大自在天神

昔下  
并南嶋志  
小平は  
一本兼  
を文米持  
おぼろ  
非之琉球記  
あ八封王  
皇代尚  
元王時の  
るのと流  
史餘論ホ  
りしころ  
りしころ

と奇祀もあはれ寛平延喜のおん財小重用せし贈正一位太政大臣菅原  
朝臣道真公の神冥あてまじまはるの神人間ふあまそくし日の朝廷ふ  
つて私なく風流鹽梅の臣より文筆の才古今も備うくせし  
左大臣時平公も媚れ罪なきて太宰権帥小左近せられまひしとあり  
首尾の箇様くくとおちもなれ説きしまは林太夫の感涙を禁めあへ  
いよう信心を發しこれよりして毎且は彼崇徳院の濱千鳥の御製  
の梅ざらあはれとあれのほ教を口吟け拜しけは一年異朝へ使  
はとて渡唐の船津別なれ梅花海めて反覆り船中の人たうと溺れ死  
りけは林太夫の梅の技も携著て流れて遂お他船も助けられ  
て故國へ帰るとぞはなりかゝる再度の眞助を感佩して姑米嶋に神社を  
建立し天満宮をなありりされ琉球國に天満宮をなありりなれ

林大夫よりいひし事とす。琉球記 本づく 不題為朝の大里の城へ入り多ひても左  
 右にふるまきてていやくも秋の比ふるりし。國中をうち巡りて民の苦勞  
 を伺ひ農を勧め業を激さんとして後者さういと妻。大里の城を出て中  
 天孫廟へ詣て幣帛とてさる。越て中城へ赴た。王女が侍ひ夫婦  
 りりとも小廟岡へ詣て先王尚寧の廟を拜し。又廉夫人の薨る事ひ  
 姑場に至りて叮嚀ふこれをさる。途の存なれば越来山なる真宿が  
 率都婆塚へ香華とて向んとて件の山へ攀もてさる。松壽とて城を  
 出く道次ふ迎とてさる。恩澤亡妻が枯骨あり人賢。多ふと有が  
 下ふふ黍とて拜謝して。さる先ふたちて。御導とていひしけ。か  
 主従山に登りゆくと数十町はして雷兩響。降とて。か。あ。り。た。る。松。の  
 下ふま在て。さ。じ。霽。う。を。俟。多。人。バ。勿。心。地。霹。靂。一。声。震。う。く。は。と。り。遠。

か。は。落。り。と。お。か。し。く。て。中。が。て。雨。歇。雲。暗。む。け。れ。ぬ。主。従。と。樹。の。下。不  
 知く率都婆塚とてさる。雷ハこの処へ落りけん墳墓へ墜れし。た  
 て土中に赤子の啼声とて事乃存いと怪かりし。ふ。為。朝。中。が。て。土。が  
 かん拂ひてさる。あ。お。生。れ。て。い。ま。さ。百。日。と。い。ひ。預。さ。る。赤。子。の。あ。う。も。存。生  
 して一人の男子一人の女子とありし。そのとれ王女の良人とともに  
 袖あけけ抱れり。松壽をええりて室あや。あれは是。是。踏。が。鬼。魁。の  
 産ところして陶按司の子われり。彼真誘へ足下の妻  
 とふなりゆれと。只。百。日。も。い。と。る。住。と。そ。の。身。團。難。ふ。死。し。と。い。ふ。と。い。ふ。  
 さ。さ。る。遠。職。と。い。ふ。さ。れ。の。あ。や。事。と。預。さ。る。さ。の。身。率。都。婆。は。湯。心。の。使  
 り良人。奇眉とて實。外。の。奇。縁。な。れ。の。その。氣。を。感。ぶ。子。と。産  
 と。亦。さ。し。と。姪。が。と。鶴。ハ。五。百。年。は。して。遊。北。せ。と。雌。雄。相。見。て。孕。む。と。い。ふ。あ。の。

春 記 卷 一 中 卷 下 四



夫婦再婚の  
夫婦墓の  
来由

右言... 夫婦再婚の来由

これら八氣を感じて孕てまはれ  
糸を足彼とらち観り。今この男女の存生とんや高間太郎と磯荻小  
うく肖より。件の夫婦不忠我の志ふしとくども不幸世と彼底山  
沈ひのうら魂魄忽地鯉魚小憑て舜天丸が死を救ひしものなり。足  
彼りつて奇といふべし。よりて古の男児と高満と名づけ女子と小萩  
と名づけ京都御墳と更て夫婦墳と唱ふべし。よく慈愛て養育する  
之宜へむ松壽も老づく嗟嘆し。某この山お世を潜へ折彼千歳ハ  
有外て四月あやりのけんじ。さんと千歳ハ真鶴う魂鬼ありと嘆  
て有身へうもゆふんばあれま公の惑ひるんとおのひ捨てぬ  
が土中はその子を産しと奇怪あへ過されども凡天地の大なれ変化  
本来疆ならんべ。その事さしとく久しに某いまだ一子を奉へ八町磔

も子へかたれど仰ふよりて外孫とれ龜を養へば羨し。現は後さ  
不孝し。といとを憂くゆひしお木思縁は存生を奉して終び言結  
小盡ぐじと信やうも回答つ。後者して墓の土石を舊のまじり流  
それ。鎮西為朝と塾打とれ鐵一ツを拾ひひり。松壽もやも是  
をよて廿ふふ雷芥などあやめん八郎按司のおん名を考る世しハ  
ころろはぐじとく。やうて為朝みやわんをれば。為朝つくとくして眉  
を頻めむしとれ。肥前流浪しとれ木綿山小狩らして雷獸が  
とるこあり。そのとれ箭ごとく入らるれども。速か雷獸の往方と考ら  
原來は。真鶴が墳墓と山朋して。その子と出世雷公ハ。ゆしつが征矢  
を負とれ木綿山の獸めて乳母子須藤を震れとれ。為朝が恨と解  
とて。こふはの子と授かる人物の因果ハ。くまやあ。ありとある世の

物語の書も留めし今更ふらひ物も須後がこと山雄野風がこと  
 ありて顔未と告り入へ衆皆耳に刺しけり。かくて為朝夫婦の墓  
 の城に入りて兩三日通笛し亦復之者と巡り果て小琉球ふ赴て赤瀬  
 の碑を拜し多ふ為朝彼此又え之りて。この処の風系よく伊豆の  
 大嶋中似たりと云ひし。かく小琉球を更めて今へ来て大嶋と唱へ  
 亦彼赤瀬の碑の禍獣を然あしれはてその一名を福家と云ふと  
 名傳信録を按ぞる小大嶋の中山より水行三日の達るべし。みづら  
 小琉球と稱をとらふ即是なり。さう終ふ陶松壽とありひもかほと  
 兩見を記し。飲ぶことかだる。乳母して養育する。いと健やうふ  
 生育けり。後世揚文鳳が夫婦墳を吊詩あり。巻端画上のせり。

椿説弓張月残編卷之四畢

中  
 月  
 残  
 編  
 卷  
 之  
 四  
 畢

